イムス札幌内科リハビリ

院内デイケアが好調
認知症BPSDが減少

手稲区のイムス札幌内科リハビリテーション病院（横尾彰文院長・150床）の認知症看護認定看護師、作業療法士、認知症ケア専門士が1年前にスタートした院内デイケア「ひだまり」が好調だ。患者として接するのではなく、家庭的な雰囲気の中で「その人らしさ」を尊重することでBPSDが減少。認知症ケアにとどまらず、運営ボランティアの活動が患者の作業療法、地域高齢者の介護予防につながるなど、活用が広がってきた。

同病院は2024年7月から全床回復期とし、リハビリを前面に打ち出す。環境変化による不安によってBPSDが強まるなど、認知症を持つ患者へのリハビリ提供が課題となっている。

そういった現状を改善するため、岩上好美看護主任は、認知症看護認定看護師を取得。患者から「自宅のような場があればいいのに」という声を受けて「ひだまり」の開設を提案した。

ひだまりは2023年11月からスタート。2階西棟の空きスペースを活用し、火、水、木曜の午後1時半から4時まで開催する。ぬいぐるみ、ギターなどを配置して極力安心できる家庭的な雰囲気を演出。ひだまりスタッフが考案したゲーム、工作、体操などのメニューほか、ボランティアによる水彩画、カラオケ、ピアノ、ウクレレ演奏など多彩な企画が用意され、患者自身が選んで自由に過ごす。

カフェのようにコーヒー、お茶、ノンアルコールビールなどを用意し、患者、ボランティア、職員間で会話と交流を楽しむ。「患者としてではなく、お客様として歓迎の気持ちを表現するようにしている」と、岩上看護主任。

ひだまりの参加は▼認知症、せん妄によって穏やかに過ごせない▼リハビリの個別リハが困難－などの課題を抱える患者が対象。各病棟のリンクナースとリンクOTのチームが毎月のカンファレンスによって参加を決める。利用が合わないケースもあるため、毎月リンクOTが評価して状況を確認している。

作業療法士の塚田えりか係長は、「ひだまりへの参加によってBPSDが落ち着き、病棟でのリハビリにも良い効果が得られている」と手応えを口にする。

半年前からは、入院患者が生活リハビリの一環としてひだまり運営のボランティアを担っている。脳梗塞などによる後遺症のリハビリとして、会場の掃除、ぬいぐるみなどの物品類の清掃ほか、飲み物を参加者に提供している。

入院患者は、ボランティアを通じて社会参加への意欲につながっており、2人の患者が、退院後も引き続きボランティアを継続している。

外来リハビリでもボランティアを取り入れたところ、同病院のシーツ交換、清掃などの業務に従事するナースサポートとして就労につながったケースもある。

開設当初の参加者は患者8人だったのが、今では多い日で22人が参加するようになった。参加者数と開催頻度が増えてきたため、地域住民ボランティアを募ったところ、水彩画、カラオケ、折り紙などを披露する地域住民が11人ほど集まり、メニューが多彩になった。

ボランティアは70～80代の高齢者が大半で、ひだまりを通じて生きがいと役割を見出すなど介護予防としての役割も見えてきた。

岩上看護主任、塚田係長はともに「入院患者、地域住民、そして職員も元気をもらえる取り組み」と強調。ひだまりが持つ多様な可能性に期待し、「今後は週5回開催を目指したい」と意気込む。

ひだまりスタッフの岩上看護主任（右）と作業療法士の塚田係長

北海道医療新聞　2025年1月20日号